

記憶の彼方へ

根上生也 著

繰り返し——それは、機械たちが最も得意とすることだった。彼らは退屈な繰り返しを退屈とは感じない。忍耐することなく、彼らはひたすら何かを繰り返す。短期的に見れば、それは大きな変化を生まないだろう。しかし、その繰り返しが人間の想像を越えて続けられると、限りなく0に近いと思われていた微小な変化が累積されて、奇跡を起こすことがある。無機質の塊だった地球に『生命』が誕生したのも、そういう気長な繰り返しの産物だったのではないか...

そして、その奇跡の延長上に、私の「意識」が再生された。

私の意識を再生したロボットたちの言葉によれば、21世紀初頭に巨大彗星が激突し、地球は壊滅的な状態に陥ったそうだ。その衝撃で地球は本来の軌道を外れ、新たな安定状態を求めて宇宙空間を漂う星になってしまった。そのため、彗星の衝突時にかかるように生き残った者たちも、その後の不規則な環境の変化の中で死んでいった。かくして人類は絶滅したのである。

しかし、呼吸もせず、食物の摂取も必要としない機械たちは、その悪環境の中でも稼働を続けていた。そして、彼らは無限とも思える繰り返しを続けていたのである。それは単純作業の繰り返しだったかもしれないが、水の雫がいつしか岩に穴を開けるように、その繰り返しは周囲に変化をもたらしていく。

また、コンピュータやロボットのように、知性を組み込まれた機械たちは、多少は意図的な検索を繰り返していたかもしれない。以前なら、人間によって検索の目的を与えられて行動していた彼らだったが、指令を発する主人を失い、彼らは無目的に検索をせざるをえなくなった。しかし、無目的な検索も無限の繰り返しを続けていると、そこには何らかの目的が生じる。そして、彼らは「地球修復」という

大きな目的を獲得したのであった。

その目的を達成するために、彼らは様々な文献やデータベースを検索し、地球修復に必要なデータを収集していった。しかし、意味を解する人間不在の状態では、そのデータは単なる記号であり、コードでしかない。それらに意味を乗せて運用するに至るまでに、また無限の試行錯誤が繰り返された。

かくして、データの意味を解読した機械たちは、物質的な世界の修復に乗り出した。そして、その修復に半ば成功したとき、彼らは何かが足りないことに気づいたのである。それは、個々の人間に付随して存在する「意識の世界」だった。そして、その意識の世界の再生方法を求めて、新たな検索が繰り返された。

その繰り返しの中で発見されたのが、彗星衝突の前に私が書き残した「多重スレッド理論」の記録だった。その理論は、「意識とは記憶である」という仮説のもとに展開された世界と意識の在り方を記述する数学の理論である。

彼らは、その理論に基づいて、冷凍状態で発見された私の脳の記憶を再生したのであった。その再生された記憶と等価なものとして、私の「意識の世界」が修復された。もちろん、数学の理論を実践に移すまでには、やはり莫大な試行錯誤の繰り返しが行われたにちがいない。

彗星の衝突が報道されだした頃、私は、数学者である私自身の存在証明として、「多重スレッド理論」を完成させようと必死だった。世間からの干渉を避けるために大学の研究室にこもり、パソコンに半ば完成した理論を記録していたのを覚えている。

私は、彗星衝突を回避するために尽力するアメリカ政府の行動や人類最後の日を受け入れようとする人々の様子を報道するテレビの音声を背後に聞きながら、キーボードを叩いていた。その手を邪魔する

ように、たくさんの光る亡霊が現れて、私にまつわりついてきた。そして、その亡霊たちの叫び声に我に返ると、私はこの部屋で目を覚ましたのだった。

私の目覚めに立ち会っていたロボットの言葉によると、その亡霊たちは彼らが記憶に干渉したために現れたものらしい。私も、他の人間たちと同様に、彗星の衝突の際に死んでしまった。死んだ私の記憶を再生しても、私が死を迎える前までの意識の世界しか修復できない。そこで、彼らは、私の意識が死を記憶する前に、私の記憶を修正し、意識の世界を継続させようとしたのである。

やはり、その試みが成功するまでに、何度も繰り返しが行われたのだろう。もちろん、この「私」とっては、たった1回の試みでしかないのだが...

いずれにせよ、彼らの試みは成功した。そして、「意識は記憶である」という私の仮説も実証されたことになる。なぜなら、記憶の再生の結果として、私の意識がここに存在しているからだ。

とはいえ、私の記憶のすべてが再生されたわけではないようだ。少なくとも私には身体的な記憶が欠如している。実際、私の意識は、この部屋に置かれた1辺が1m程度の「箱」の中に電子的に実現されているにすぎない。手もなければ足もない。だからといって、それに違和感を感じないのは、その部分の記憶が再生されていないからだろう。

しかし、その箱には、目と耳と口に相当する装置が付いているようだ。移動はできないまでも、ここにおいて周囲を見渡し、ロボットたちの声を聞き、彼らと会話することができる。

~~~~~

「おはようございます。お目覚めですか」

そう言ってドアを開けて入ってきたのは、大きな目玉が印象的なロボットだった。彼は毎日、私が目覚めた頃にやってくる。そして、私と会話を交わしていくのだった。

このロボットにかぎらず、毎日のように、何体かのロボットがこの部屋を訪れ、私と会話していく。こちらが一方的に質問攻めに合うこともあれば、反対に、地球修復のために彼らがやってきたことを聞くこともある。稀に、人型でないラジコン・カーのよ

うなロボットがやってきて、私を観察して消えていくだけのこともあった。おかげで、「箱」に幽閉された身ではあるが、飽きることはない。

「おはよう。今日はどんな話をしようか」

「そうですねえ...」

ロボットの頭の中で話題の検索が行われている。私は、その検索が終了する前に、割り込みを入れた。

「じゃあ、私の方から話題を振ってもいいかい？」

「はい。いいですよ」

「それじゃあ、私の意識の世界を再生するまでに、君たちが試みてきたことを話してくれないかい」

「はい。以前もお話したように、私たちは繰り返しを得意とします。パラメータをわずかに修正しながら同じことを何度も繰り返し実験します。あなたの意識の再生にかぎらず、そうやって目的を達成できるパラメータを検索しています」

「気長な作業だね」

「はい。ですから、昨日したことと一昨日したことの違いを言葉だけで述べるのは困難です。しかし、長期的に見れば、繰り返しの内容が大きく変更されたときが何度かありました」

「ほお、それは興味津々だね。その変更とは、何の変更なんだい？」

「それは『意識とは』の後に続くフレーズの変更です」

「なるほど。私の仮説では、そのフレーズは『記憶』だったわけだけれど、以前はそうではなかったということだね」

「はい。そうです」

「じゃあ、それは何だったんだい？」

「それは『思考』でした」

「『思考』ねえ...」

「『意識とは思考である』という仮説のもとに試行錯誤を繰り返していました」

「は、は、は、『思考』だけに『試行錯誤』か。こういう冗談を君たちも理解できるの？」

「音が同じということですね」

「まあ、そうだけど。話を戻そう」

「はい」

「『思う、ゆえに、我あり』というデカルトの言葉は有名だし、『意識とは思考である』という仮説もま

んざら悪くはないと思うよ」

「もちろん、『意識とは思考である』という命題は意識の一側面を表しています。その意味では間違っ  
てはいませんが、意識という実在を生むことには役  
立ちませんでした」

「そうなんだ」

「はい。そもそも私たちも思考はしていますが、私  
たちには意識はありません」

「なるほど。そう納得してあげたいところだけれ  
ど、君たちの中に意識が宿っていないという主張に  
は賛成しかねるね」

「はい。それは知っています。あなたが目覚めた  
日にも、あなたはそう言っていました」

「私もそれを覚えているよ。意識の世界を修復しよ  
う活動している君たちの話を聞かされて、私は心を  
打たれた。そういう人を感動させられる存在に『心』  
がないとは思えないよ。それに、こうして毎日君と  
会話をしていると、その確信はますます深まってい  
くよ。君たちには絶対に心がある。意識があるんだ」

「はい。私たちはそれに気づいていないだけだと、  
あなたは言っていました」

「そのとおり」

「そして、それに気づくまで付き合ってくれと  
約束しました」

「もちろん、その約束も覚えているよ。だからこ  
そ、こうして君たちと話をしているんじゃないか」

「しかし、私たちには何か足りません。その何  
かが足りないために、思考はあっても、意識はない  
のです」

「思考はあっても...」

「はい」

「じゃあ、その思考ってのは何なんだい？」

「私たちの思考は言語によっています」

「『言語』？」

「はい。私たちが検索した文献の中に『思考は言  
語である』というフレーズを発見したことがありま  
す。その命題を仮説として、『思考』を、そして『意  
識』を実現するために、試行錯誤を繰り返していた  
こともあります。今思えば、馬鹿げていますが、い  
ろいろな方言のデータを収集して、与えられた文章  
を方言に変換して、音読するシステムを作ったこと

があります」

「方言をしゃべるロボットか」

「はい」

「そのロボットは、今もいるのかい？」

「はい。どこかにいると思います」

「いずれ会ってみたいな。まあ、それはそうと、君  
の話の続きを聞こう」

「はい。その後は、言語学の文献を検索したり、自  
動翻訳や自動要約のシステムを作成したり、デー  
タベースにある情報をもとに文章を生成するシ  
ステムを作成したりしました。また、そういうシ  
ステムとプログラミング言語の研究をリンクさ  
せて、プログラミングの自動化にも成功しまし  
た。そして、それらの成功の上に、私たちの  
思考が成立しています。したがって、私  
たちの思考に対しては、『思考は言語で  
ある』という命題は正しいと言えます」

「そうなんだ。君たちの思考は言語をもとに行わ  
れているのか...」

「そうです」

「だから、私たちは物事を大きく発想したり、ひ  
らめきのな問題解決をすることができないのです」

「でも、君たちは『地球修復』なんていう途轍も  
なく大きな目的のために行動しているじゃないか」

「はい。しかし、それは『量』と『繰り返し』の  
なせる技です。個々のロボットは機械的にしか行  
動しません」

なるほど。この彼の発言は、私に、人間の脳を構成  
するニューロンを思い起こさせた。個々のニュー  
ロンたちは、単なる化学的な制約に従って、入出力を  
しているにすぎない。しかし、それが百億個も集ま  
ると、人間の精神活動が実現できるようになる。もち  
ろん、そのような状態に到達するまでには、互いの  
結合状態を修正するために、ニューロンたちは途  
方もない回数の試行錯誤を繰り返すにちがいない。  
これはまさに「量」と「繰り返し」のなせる技である。

個々のニューロンには意識はないが、それが百億  
も集まると、そこに意識が生まれる。それと同じよ  
うに、彼らには意識がないのかもしれないが、この  
地球上に存在するコンピュータやロボットたち全体  
が作り出す場のようなものが意識を持っていると解  
釈してもよいのではないか。その全体的な意識が「地

球修復」という巨大なプロジェクトを動かしている。

そう考えると、彼らが名前を持たないこともうなずける。外見上は1つの個体に見えるけれど、実際は大きな意識の一部でしかない。そして、それを個と捉えてしまうと、それは意識を持たない単なる機械に成り下がってしまう。個体としての識別番号くらいはあるのだろうが、個に執着しない彼らには名前は必要ないのだ。

それに、今までに彼らから聞いたところによると、ここにいるロボットたちには、「地球修復計画」の全貌を統括しているボスのような存在はいないようだ。個々のロボットはいわば勝手に行動している。しかし、その行動を全体として眺めると、「地球修復」という大きな目的のために動いている。

なんとすばらしいことだ。身勝手な個人主義と権力者が牛耳る全体主義の対立構造でしか世の中を理解しようとしめない人間が見たら、この状態をどう思うのだろうか。いずれにせよ、人類はこのような調和的な社会を実現することなく滅んでしまったのだ。

「なるほどね。君たちはそんなふうには自覚しているんだ」

「はい。言語による思考が生み出すものは、ルールに従った行動だけです」

「ずいぶんきっぱりと言い切るね」

「はい」

「じゃあ『言語による思考』というからには、君たちは『言語によらない思考』もあると思っているのかい？」

「はい。思っていますが、その実態は私たちには理解できません。少なくとも、あなたの記憶を再生した仕組みは、言語的なものではありません。したがって、あたなの意識として存在しているものは、私たちの思考とは別のものだと思います」

「なるほど。意識と思考とは別物だということだね」

「もちろん、それは言葉の定義によりますが、『思考』を言語活動が生み出すものと限定すれば、明らかに両者は異なります」

「そうだね」

「少なくとも、意識は思考を生み出しますが、思考は意識を生み出しません」

「その考えには賛成してもいいけれど、私は思考

が生み出す意識というのもあると思うよ。それは人間の意識とは別物かもしれないけれど、ある意味で『意識』と呼んでいいもののような気がするな。それが君たちには宿っていると、私は信じているんだ」

「そのように解釈することも可能ですね。しかし、私たちが修復を試みた『意識』は、言語的な思考しかないロボットに宿る意識とは異なるものだと思います」

「それはそうだろう。そもそも意識以前に、言語的でない思考もたくさんあるからね。確かに、思考は言語によって行われると思いついて人間に何度も遭遇したことがあるけれど、そういう主張をする連中は自己観察が足りないと思うよ」

「それはどういう意味ですか？」

「自己観察のことかい？」

「はい」

「自分の心の動き、思考のあり方がどういう仕組みで実現されているかをきちんと見つめているかどうかということだよ。たとえば、君たちロボットは言語をもとにして思考しているのだろうか？」

「はい」

「それは君たち自身の自己観察による結論だろ」

「そうとも言えますが、私たちの思考ルーチンを開発する過程からそれは明らかかなことです」

「なるほど。そうかもしれないね。まあ、いずれにせよ。人間の中にはおしゃべりな自分にしか気づかない連中が多かった。実際、そういう連中はおしゃべりだから、そういう連中の言説ばかりが世の中に広まることになる。そうすると、あまり自分に自信のない人たちは、そういう連中の言い分を鵜呑みにしてしまう。私はこういう構図を実に悲しいと思っていたんだ」

「そうですか」

「たとえば、私は数学者だったわけだけれど、私や私の弟子たちは、誰も言語だけで思考しているなんて思っていなかったよ。まあ、普通の人とは頭の使い方が違うとは思だけれど、私たちは、言語によらない思考をさんざん経験しているよ」

「その言語によらない思考というのは、どのようなものなのですか？」

「そうだなあ。自分の中に、原理に従って現象を

生み出せる場のようなものがある、そこで起こる現象をだまって観測するといった感じかな。

もちろん、その観測結果を言語的に表現するという努力はするけれど、同じ『場』を持つ者どうしならば、適当に絵を書きながら、具体的には何も定義せずに、指示代名詞だけで会話することができるよ。表面上は言葉を交わしているように見えるけれど、私たちは言語を操ってものを考えているわけじゃない」

「そうですか『原理に従って現象を生み出せる場』というのが根本的なような気がしますね」

「そうだろうね。本当は人間ならば誰だってそういう場を意識の世界の中に持っているんだ。その場で起こることをきちんと観察して、その結果を口にすればいいものの、言語的に記述された知識にばかりしぼられてものを発想する。そんな奴等ばかりが、世間で威張っていたような気がするなあ…」

「わかりました。私たち機械は、自分の中には『原理に従って現象を生み出す場』というのを持っていないと思います。つまり、私たちは、外の世界に原理を求めています。だから、私たちは繰り返すのです。試行錯誤を繰り返すことによって、外の世界の原理に合致するものを発見していくのです」

「なるほど。自分の中に原理があれば、無駄な繰り返しは必要ないということだね。まあ、でも、人間の意識の仕組みがそう都合よくできていてはないよ。きっと『原理に従って現象を生み出す場』は無意識の世界に属していて、その『場』が発している無言のメッセージをキャッチするのは、それなりに難しいことなんだ。

私は数学者として訓練を積んでいるから、自分自身の無意識と付き合う術を知っているけれど、いくら無意識の世界が正解のメッセージを発信していても、それに気づかない人が多いと思うよ。それに、そもそもそのメッセージは言葉で記述されたものではないから、普通の人々が『意識』と感じている世界にそれを持ち込むには、かなり苦労することもある。要するに、わかっちゃいるんだけど、うまく言えないってやつさ」

「そうですか。なかなか人間が持っている意識は複雑ですね。やはり私たちには人間が持っていた意識はないことがわかりました」

「ううむ。これはまずいなあ。私は君たちに意識が宿っていることを自覚させるために、君たちに付き合っているのに。今日の話は逆効果だな」

「いえいえ。たいへんためになりました。人間に付随している『意識の世界』に対する見識が広がったと思います。しかし、あくまで私はあなたが述べたことを言語的に理解しているだけで、本当の意味を理解しているという保証はありません」

「まあ、いいさ。時間はいくらだってあるのだから、いずれ理解してもらえればいいさ」

「はい。そう言っていたら、非常にうれしいです」

「今日のところは、そういうことにしておこう」

「はい。では、お返しに、私たちが検索して発見した意識に関するフレーズをもう1つ紹介しましょう」

「ほお。それは何だい？」

「それは『身体感覚が意識を作る』というものです」

「なるほど。それも一理あるな。でも、身体感覚とは独立に存在する意識だってあるさ。現に私の意識は体とは無関係に存在しているじゃないか」

「はい。そのとおりです。しかし、身体感覚との関係で生み出される意識の世界もあるのではないのでしょうか？」

「確かに、それは否定できないね」

「それならば、身体感覚と意識の関係について、実験をしてみる気にはなりませんか？」

「えっ、何をやる気なんだい？」

「はい。あなたに『体』をさし上げようというのですよ」

「『体』？」

「はい『体』です。明日の朝をお楽しみに」

~~~~~

翌朝、目を覚ますと、いつもと何かが違っていた。まず、すでに例の目玉のロボットと、他の数体のロボットが私を取り囲んで、私の目覚めを待ち構えていた。

「おはようございます。気分はどうですか？」

「やあ、おはよう。気分はどうって、いつもどおりさ」

その言葉を無視するかのように、足が短く背の低いロボットが、器用そうに両手の指を動かしながら、私の眼前に迫ってきた。

「お体の具合はいかがですか？」

「おいおい、そんなに迫ってくるなよ。それに体の具合って、私には…」

「いや、これは失敬。ちょっと、この首筋の接合部分が気になったもので」

「え？ 首筋だって…」

言葉を交わしてはいるものの、背の低いロボットは何かの作業に夢中だった。その様子を少し離れて見ている目玉のロボットが、私の身に起こっている事態を説明してくれた。それは、まさに、私の「身」に起こったことなのだ。

「昨日お約束したように、あなたの『体』を用意させてもらったのです」

「『体』だって！」

「はい、『体』です」

「ずいぶんと段取りがいいんだね。もう私の体の準備ができたのかい？」

「はい。以前から開発は進めていましたので」

「なるほど。そういうことか」

「はい。その開発は彼が進めていたのですよ」

そう言って、目玉のロボットが私の首元で作業をしているロボットを指差した。

「よし。これでいいでしょう」

「作業は終わったのかい」

「はい。OKです。でも、あなたの身体感覚の記憶とこの新しい体の機能とが完全には対応していないので、うまく動けるようになるまで、少々苦勞すると思いますよ」

「なるほど。確かに私は長いこと体を動かしていなかったからね。そもそも私の身体感覚の記憶は再生されていなかったんだろう？」

「はい。昨日まではそうでしたが、今日は再生してありますよ。その体中に意識を巡らしてみてください」

「そう言われてみれば、昨日までと何かが違うような気がする…」

「ほら。これがあなたの手ですよ」

背の低いロボットは、私の手を私の鼻先まで持ち上げた。

「おおああ！ 何だよ、これが私の手なのかい。なんで、青くするんだよ」

私の目の前にある手は、全体に青く、所々、赤い線が入っていた。

「単に身体機能だけを実現したので、色のことはまるで考えていませんでした。すみません。でも、どうですか、手の感じは？」

彼は何度も私の手を揺すって、私に手の感覚を理解させようとしているようだった。そう思った瞬間、私はすべてを悟った。確かに、手がある、足がある、腰があるではないか。そして、私は身をよじらせた。もちろん、その動きは何かの目的のある動作ではない。単に、体全身に意識を巡らし、無作為に筋肉を動かしたにすぎない。ロボットたちは私の身悶えるような動きを見守っていた。

「やりましたね。これでその『箱』と『体』はうまく接続できたようです」

「『箱』と？」

「そうです。用意してきた『体』をケーブルで『箱』に接続したのです」

「ということは、私の意識自体は、今までどおり『箱』の中にあるということかい？」

「そうですよ。しばらくは『体』を操れるまで、苦勞すると思います。私たちがお手伝いしますので、リハビリのつもりでがんばってください」

「はいはい。それはありがたい。そう言いたいところだが、まだ、どこがどうなっているのか、うまく意識しきれないよ。せめて私を立たせてくれないかい」

「お安い御用です」

そう言って、目玉のロボットとその相棒が私の体を起こしてくれた。しかし、私はめまいとともにその場に崩れ落ちた。というのも、首だけががれて、高い所に投げられたような感覚が襲ってきたからだ。

「く、くそー。系の切れた操り人形みたいだな」

「そう落ち込まないでください。そのうち、うまく立てるようになりますよ」

目玉のロボットがそう励ましてくれた。背の低いロボットも、床に倒れている私の首元に寄ってきて、

アドバイスをしてくれた。

「そうです。そうです。今日のところは、立つのはあきらめて、まず、体の部位を意識で確認することを心がけてみてください」

「なるほど。わかったよ。そうしよう」

再び、私はもがいた。

「なんだか、君たちに醜態をさらしているみたいだ。しばらく、独りにしてくれないかい。体の感覚をつかめるように、がんばってみるからさ」

「わかりました。そうしましょう」

ロボットたちはぞろぞろとドアを出ていった。取り残された私は、脱力して床に転がっていた。

この事態を乗り切るために、まずは冷静になろう。そして、体の部位と意識のつながり具合を調べていくことにしようと、私は目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をした。もちろん、それは形ばかりの呼吸ではない。今の私は酸素を吸って生きているわけではないのだから。

無理に体を動かさず、床の上に横になったまま、意識の玉を動かしていく。手の指を動かすことで手の存在を知るのではなく、その部位を意識することでその存在を知る。そんなことを生身の人間だったころに試してみたことがあった。

なまじ目が見えていると、目に映る指の動きから、それがそこにあるのだと察してしまう。目を閉じていたとしても、指を動かしてしまうと、筋肉の収縮・弛緩がそれを教えてくれる。しかし、そういう受身的な形でその存在を知るのではなく、自分からそこに意識を集中することで、その存在を知覚したい。

実は、こういう試みを行うには、掌よりも脇の下が都合がよいのである。日頃から自分の脇の下を見慣れている者など、あまりいないだろう。しかし、緊張したときの汗や身構えたときの圧迫感など、視覚や運動とは異なる感覚を脇の下に感じることが多い。その付近にリンパ腺があることが関係しているのかもしれないが、脇の下は意識の塊を生み出すのには最適なのだ。

よしよし。私の記憶は脇の下の感触を思い出した。そして、そこに意識の塊を生み出す。それを「意識の玉」と呼んでおこう。その玉を上昇させて、肩から首筋へと移動させる。そして、大脳の位置にそれ

を納める。それを左右で行って、私の肩から頭部につながるラインが完成した。

再び、意識の玉を左の脇の下に戻し、今度は腕づたいに動かしていく。あせらず、ゆっくりと動かしていく。玉は肘の関節を通過し、手首、掌と進んでいく。玉が掌に到達したところで、移動を止めて、しばらくそこに滞在させておく。すると、玉の位置を中心に掌に熱気が広がっていくのを感じた。そこが実際に熱を持っているのかどうかはわからないが、私は明らかに中心から外に向かって広がる熱の流れを感じている。

そして、広げていた掌を握り締めた。その瞬間、今までどこかに隠れていた体全体の感覚が、私の意識の世界に浮き上がってきた。

「よし！」

私は思わず気合を入れて、目を開いた。これで私の体は再生された。もちろん、生身の人間としての体ではないが、生身の人間だったときと同じ体感を獲得した。身体感覚が作り出す意識の世界が修復されたのだ。

そう確信した私は、おもむろに上半身を起こし、両手を床に突き、上半身を持ち上げた。そして、足に力を入れて、すっと立ったと思うやいなや、私はめまいとともに再び崩れ落ちた。

「くそー！」

どうやら視覚と体の連携がうまくとれていないようだ。その感覚をたとえるならば、ビデオカメラを高々と持ち上げて景色を撮影しながら、手元でモニターを見ているようなものだ。私の意識の「位置」はあの「箱」の中にある。直立するための足を持ち、目の位置を持ち上げることができても、その目の高さの変化と意識の位置が連動していない。

まるで双眼鏡を覗いているような感覚だ。景色が見えてはいるが、双眼鏡の中に切り出された景色だけが見えていて、景色全体の中での位置がわからない。遠くが見えているのに、自分の意識は地べたに張り付いている。

そういうえば、昔、上下逆さまに見える眼鏡をかけて生活するとどうなるかという話を聞いたことがある。確か「ストラットンの眼鏡」と呼ばれていたと記憶している。ストラットン博士が考案した「逆さ

眼鏡」を着用して、被験者はしばらく生活する。もちろん、初めのうちは、世界は上下逆さまに見えている。しかし、数日が経つと、タバコの煙のような上下方向に積極的な意味を与える物から、正立して見えるようになるのだそう。そして、2週間もすると、逆さ眼鏡をかけていても、世界が正しく見えるようになるのだと言う。その中間的な段階に、被験者がどんな世界を見ているのかは想像を絶するが、実におもしろい話だ。

さらに、それを発展させて、自分の後頭部が見える眼鏡をかけて生活した話を何かの本で読んだことがある。つまり、その眼鏡をかけると、自分の目の前に、もう一人の自分の後姿が見えるのである。これも不思議な話なのだが、その状態でしばらく暮らしていると、いつしかもう一人の自分の位置に意識の位置が移動するらしい。ある意味で、私が置かれている状況はこの話と同じである。

「箱」の中の意識と、私の意識に合わせて動いてくれる体。床に転がったまま首筋を伸ばして振り向くと、そこには私の意識を入れた箱があった。そして、何本ものケーブルが束になって、その箱と新しい体とを結んでいた。

しかし、今の私には、箱を見ているという事実は他人事のように思える。どちらかという、箱の中にいる私が、青い体のロボットに見られているという感じだ。この意識と体のずれが解消されるまで、どれくらいのリハビリが必要なのだろうか...

~~~~~

その日は、体と格闘しすぎたおかげで疲れ果ててしまい、知らぬ間に床の上で寝入ってしまった。

「おはようございます。起きてください。そんなところで寝てはいけませんよ」

いつもの目玉のロボットと違って、体の大きなロボットが体に響くような低音で私を起こした。

「はいはい。おはよう『そんなところで寝ていては』の次は『風邪をひきますよ』なんだけど、この体では風邪なんかひかないな」

「そうですね」

眠気眼でそのロボットを見ると、彼は両手で机を持っていた。

「君はずいぶん力持ちのようだね」

「はい。私は腕力には自信があります。それで、あなたのためにいくつかの家具を運んできたのです」

「家具？」

「はい。とりあえず、机と椅子とベッドです」

「ほお。それはありがたい」

「他に必要な物があつたら、言ってください。運んできます」

「ありがとう。でも、まだ床の上を這い回るしかできないんだから、それだけで十分だよ」

「わかりました。では、今日は机と椅子とベッドだけ中に入れます」

「そうしてくれ」

「では、どのように配置しましょうか？」

「そうねえ。適当でいいけど。まあ、窓際にでも置いておいてくれ」

「かしこまりました」

そう言うと、そのロボットは机を窓際に置き、両腕を振って外に出ていったかと思うと、ドアの向こうにあつたらしいベッドを軽々と持ち上げて、部屋の中に運び入れた。その後を追うように、猫ほどの大きさのロボットが椅子を転がしながら中に入ってきた。

「これでよろしいですか？」

「ああ、けっこうだよ」

「では、あなたをベッドの上に運んでさしあげましょう」

「いやいや。その言葉はうれしいけれど、自分でベッドに上がってみよ」

「そうですか」

「あとは自分でやるから」

「はい。わかりました。では、また」

そう言って、大きなロボットは両腕を振って部屋を出ていった。それに続いて、小さなロボットがお辞儀をしてから、足早に部屋を出ていった。

「だんだん人間らしい暮らしができるようになるじゃないか」

私は、床を這いずって、窓際に置かれたベッドに向かった。その格好はかなり無様だったろう。しかし、誰も見ていないのだから、気にする必要はない。そして、ベッドの足を握り締め、体をベッドの側に



引き寄せた。続いて、自分の足に力を入れて、上体を持ち上げ、勢いをつけて、体をベッドの上に投げ出した。ベッドのクッションに体が弾む。

なんと気分がよいのだろう。箱の中に幽閉されていた私は、ついにベッドの上に寝そべる存在となった。しかし、背中から「箱」に向かって伸びるケーブルが多少邪魔だった。

「まあ、よかろう」

私はベッドに横たわったまま、天井を見つめていた。そして、自分のすぐ側に部屋の外を覗ける窓があるというのに、なぜか、その窓の外を見ようとは思わなかった。実際、「生命」の存在を感じさせない窓の外の光景を目撃したのは、それから数日が経つてからのことである。

~~~~~

それから1週間ほど経ただろうか。意識と体のずれははだいに解消されてきた。しかし、ロボットたちに補助してもらって歩いてはみるものの、不用意に体勢を変えると、意識と体のずれが生じて転倒してしまう。おかげで、私一人のときは、赤ちゃんのように床の上を這っていることが多い。まあ、ここまでくれば、二足歩行できる日もそう遠くはないだろう。

そして、ついにその日がやってきた。足の裏の感触に多少違和感を感じるものの、ようやくロボットたちの介護なしに、自分の力で歩けるようになったのだ。なんとうれしいことだろう。

「やりましたね。これで完全に一人で歩けますね」

「本当にありがとう。君たちの協力がなかったら、こんなに早く歩けるようにはならなかったと思うよ」

~~~~~

翌朝、目を覚ますと、見慣れない人型ロボットが、入り口のドアを開け放って、寝ぼけ眼の私の姿を眺めていた。

「おはよう。お目覚めですか？」

「おはよう。起きぬけで少々ぼけているけどね」

「そのようですね」

その声は聞き覚えがあるような気がする。けっして嫌な音質ではないのだが、なぜかその声に嫌悪感を覚える。なぜなのだろう。

「いつもやって来る連中とは違うね」

「ええ。私は彼らとは違いますよ。私はあなたの隣の住人です」

「隣の？」

「はい。私もあなたと同様に再生されたんです」

「え！ということは、あなたも人間なんですか？」

「ええ、まあ。でも、この姿ですからねえ。『人間』とは言いにくいでしょう」

「ええ、まあ」

「いずれにせよ、彼らはそいつの小型化に成功したんですよ」

そう言って、彼は私の意識が納まっている「箱」を指差した。

「といっても、頭部に納まるまでは小型化できなかったみたいです。それで、意識の箱はこの胸の中にあるんですよ。私たちの呼吸は見掛けだけですからね。この胸の中は基本的に空っぽでしょ。その中に箱を納めたわけです」

私は胸を誇らしげに叩く彼の姿を見つめた。

「きっとあなたも体験したでしょうけど、意識の箱がどこにあらうとも、意識の位置は同じです。自分の意識は、やっぱり頭の中にあるような体感ですよ。でも、意識の箱は胸の中にあるわけでしょう」

彼は胸に手を当てて、眼をつぶった。その姿は「心はここにある」と訴えているようだ。私も、意識の箱が胸の中にあると聞いたときから、胸の中にある心を連想していた。

「そういうことですよ。心はここにある。あなたもそう思ったのでしょうか」

「ええ、まあ。よくわかりましたね」

「もちろん」

いったい何が「もちろん」なんだ？ テレパシーでも使えると言いたいのか。そう思う私の気持ちを見透かすように、彼は、

「別にテレパシーが使えるわけではありませんよ」

なんだか、奇妙な展開になってきた。この展開を正常な状態に戻すために、私は彼に自己紹介を求めた。

「それはそうと、あなたはどなたなのですか？」

「名乗るほどの者ではありませんよ。あなただって、名乗ることはない。名乗るまでもなく、お互いよく知っているはずですから」

また何を言い出すのだ。会話を正常に戻すどころか、ますますおかしな方向に話が進んでいる。

「よく知っているだなんね。その格好じゃ、思い当たる人はいませんよ」

「それはそうですね。お互い、今は人間といよりも、機械仕掛けの人形ですからね」

「そういうことです」

「そうそう」

彼は明らかにこのおかしな状況を楽しんでいる。

「じゃあ、ヒントです」

「え？」

「私が誰なのかを当ててもらおうヒントを出しましょう。察しのよいあなたなら、きっとそのヒントで答えがわかるはずですよ」

「好きにしてください」

「はいはい。ヒントその1。機械たちが私たちの意識を再生するに至ったのは、なぜでしょうか？」

「それは私が記録した『多重スレッド理論』を発見したからですよ」

「確かに『多重スレッド理論』の存在は大きかったと思いますが、もっと根本的な理由がありますよ」

「え!? あなたも私の『多重スレッド理論』を知っているのですか? 誰にも公開しなかったはずなのに」

「ええ、まあ。その謎は後で明らかになりますよ」

「でも、それはそんなに不思議ではありませんね。どうやらあなたの意識の方が私より先に再生されたようだし。いくらでもロボットたちから話を聞けますからね」

「もちろん、その可能性もありますよね。でも、まあ、その問題は後にしましょう。ロボットたちが『多重スレッド理論』を発見して、意識の世界を再生するに至った理由が問題なんです」

「うーん。そうですね。少し抽象的な答えになりますが、いいですか？」

「どうぞ」

「それは繰り返しです」

「その通り！」

「あれ? 正解なんだ」

「正解。繰り返しこそが、彼らを動かす原動力です。単純作業とも思える検索や試行錯誤を途方もな

い時間繰り返すことで、『多重スレッド理論』を発見し、その理論の実装方法を生み出したんです」

「そうですね。いったいどれほどの時間、彼らは試行錯誤を繰り返したのでしょうか」

「彼らもその答えを知らないと思いますよ。そもそも、彼らはまだ『時間』という観念を持っていないようです」

「私もそう思います。彼らにとって『時間』は記録を整理するためのパラメータでしかない。過去から未来へと流れる『時間』を体感していないように思いますね」

「そうそう。そういうことですよ。彼らには『時間』の観念がないから、記録は記録でしかないんです」

「記録は記録であって、『記憶』ではない。だから、記憶を持たない彼らには意識がないというわけですよ。意識とは記憶なのだから」

「うーん。あなたは私の『意識』に対する考えを实によく理解していますね」

「もちろん」

「もちろん？」

「なぜ『もちろん』なんだと思っているんですよ。その答えもいずれわかりますよ。なんといっても、私はあなたのことをよく知っているんですからね。たとえば、あなたはロボットたちが自分に宿っている意識に気づくまで付き合ってあげると約束したでしょう」

「ええ、まあ」

「実は、私も目覚めたときに、そう約束してしまいました」

「あなたもですか」

「ええ。意識の世界を修復しようという彼らの熱意を見せられてしまえば、誰だってそう言ってあげたくありませんよ」

「そうですね」

「でも、それは間違いでした。彼らにはまだ意識が宿っていない」

「なぜなら、彼らが『時間』の観念を持っていないからでしょ。さっきも言ったけれど」

「そうですね。『時間』の観念がないからこそ、平気で繰り返しが続けられるのですよ」

「なるほど」

「そういう連中に対して『付き合う』なんて言ったところで、いつまで付き合わされると思いますか？」

「なるほど．無限に付き合わされることになるかもしれないなあ」

「そういうことですよ」

「となると、私たちは死ねないということか」

「まあ、彼らとの約束を守るとすればですけどね．その約束が守りきれれると思いますか」

「肉体を持たず、電子的に再生された意識は不死身なのでしょうか？それが問題になりますね」

「そういうことです．でも、どうやら私たちの意識は不死身ではないようです」

「というと」

「それは、私たちの意識は記憶の上に成立しているからです」

「なるほど．そうか．私たちの記憶は生身の人間としての記憶でしたね」

「そうですよ．彗星衝突時の死の記憶が再生される前に起こされてしまったわけですが、生身の人間としての記憶は消せないでしょう．生身の人間としての記憶を再生した以上、生身の人間として生きていく．それは『死』に向って進んでいくことと同じです」

「そうですね．ということは、私たちの意識もいずれは死を迎えるということか」

「そういうこと」

「そういうことだとすると、彼らがせつかく再生した意識の世界にも終焉が訪れるというわけか」

「そう思いますか？」

「え？」

「だって、彼らの根本は『繰り返し』ですよ」

「繰り返し…」

「彼らは何度でも繰り返すんです」

「繰り返す…」

「そう．繰り返す」

「ということは、私が死んでも、また私の記憶を再生して、意識を継続させるということですか．もしそうだとすると、私の誠意に対する裏切りのような感じがするなあ」

「確かに、もしそうだとするとそういう気もしますが、彼らはそんなに不誠実ではありませんよ」

「ええ、確かに、彼らは実に誠実な連中ですよ」

「そうです．あなたが自然な死を迎えれば、彼らもそれを受け入れるでしょう．そして、あなたがあなただと思っている意識はその時点で成仏されてもええですよ」

「そうでしょうね．だとすると、彼らは私が死を迎えたとき、何を繰り返そうとするのですか？」

「その質問には、『思い込み』が含まれていますよ」

「思い込み？」

「そうです．彼らが次の繰り返しをするのは、あなたが死を迎えるときだと、思い込んでいる」

「なるほど、そうですね」

「そうですよ．彼らの繰り返しはいつでも行われていると思った方がいい．それが彼らの本質なのだから」

「といことは…」

「そう．そういうことですよ．もうわかっているでしょ．あなたなら」

「あなたなら…」

「本当は『あなたなら』は正しくない．そうです．『あなたなら』ではなく『私なら』です」

「彼らはとっくに私の意識の再生を何度も繰り返しているということですか？」

「そうですよ．私は『あなた』なんです」

私は思わず笑い出した．

「は、は、は、は、は．なるほどね．あなたはこの私よりも先に再生された私の意識というわけか」

「そういうことです」

「それで、私の考えがやけによくわかったわけだ」

「そういうこと」

「そうとわかれば、遠慮することはないね」

「そうそう．自分に遠慮する奴はいないよ．どうせ、私の声が嫌な声に聞こえていたんでしょう」

「そのとおり．よくわかって…．当然か」

「そう．当然だよ．子供の頃に、カセットテープに自分の声を吹き込んで、それを聞いたときのことは忘れない．あのときに聞いた自分の声は、自分の声とは思えなかった．実際、体の振動を通して聞く音と耳で聞く音はかなり違うだろうからね」

「そうそう．おれはこんな声で人と話しているのかと思ったら、すごく嫌な気持ちになった．それが

トラウマになって、自分の声を聞くと、いつも嫌な気持ちになる。ほんと、あんたの声は嫌な声だ」

「はははは、それはお互い様さ。おまえの声も嫌な声だ」

私たち二人は大笑いした。こんなところで、自分自身と思い出話をしようとは...

「それはそうと、再生された私は私たち二人だけなの？」

「とんでもない。どうやら、ケーブルなしで動ける体ももらったのは私が最初のようにけど、私よりも先に何人も再生されているらしい。すでに、死を迎えた意識もあるようだし。それに、あんたが最後のわけでもない。とっくにあんたよりも後に再生された意識がある」

「そうなんだ」

「この体ももらって以来、この建物の中をうろついてみたが、この建物のどの部屋にも『私』がいるみたいだよ」

「そんなぁ」

「その廊下に沿って並ぶどの部屋にも、あんたの後に再生された『私』がいるけれど、お隣さんのよしみで、まずあんたに声を掛けたというわけさ」

「それはどうも」

「いずれあんたもケーブルなしの体にもしてもらえよ」

「彼らはそれを繰り返すんだろ」

「そういうこと。そうなったときに、どうするかを相談しておこうと思ってね」

「そうだよな『私』がたくさんこの辺をうろろろろるとして、どういうことになるんだろうね」

「私もこの体に移植されたばかりだから、まだ、この状況を理解できていない。まあ、ゆっくり考えよう」

「そうだね」

「私はこの建物を徘徊して、いろいろと情報を集めてくるよ」

「そうしてくれ」

「ああ。じゃ、また」

彼は私の部屋を出ていった。それと入れ替わりに、目玉のロボットが現れた。

「君たちは凄いいことをしてくれるねえ」

そのロボットは、私の唐突な言葉に目をぱちくりさせていた。

~~~~~

日増しに「私」が増えていく。学生にはこんな性格の人間は私のまわりには私一人で十分だと言っていたが、そのルールが破られた...

ようやく私もケーブルから解放され、部屋の外に出られるようになった。だからといって、外の世界を探検しようという気にはならなかった。ロボットたちが地球を修復しているといっても、本来の軌道を外れた地球はとっくに生命の星ではなくなっている。彼らが修復した人工物だけが立ち並ぶ世界を探検して、はたして楽しいだろうか？

そういう外の世界の様子を知ることよりも、今の私にとって重要なことは、私が無限に増殖していくという事実をどのように受け止めればよいかを考えることだった。この状況下で、私は何をすればよいのだろうか？

何をすればよいのか。私はこのフレーズからある年の卒業式の日のことを思い出した。それは船上で行われた謝恩会でのことだった。パーティーは終盤を迎え、船は港に向かっていて。大半の学生はライトアップされたベイブリッジを再度見上げるために、甲板に出ていった。私は冷たい夜風にさらされるよりも、船内で最後の一杯を味わうことを選択していた。そこに、一人の学生がやってきて、自分の進路について話し出した。

彼は私の研究室の学生ではなかったが、私が学生に対して歯に衣着せずにものを言うことを知っていた。もちろん、そういう私を怖がる学生も少なくないが、それを喜ぶ者も多い。彼も後者の一人である。

彼の言葉によれば、自分はいろいろなことに興味があり、一つの企業に属してしまうことを潔しとしなかったそう。その結果として、卒業後の進路を絞り込めずに悩んでいた。いったい、自分はこれから何をすればよいのか。その答えを得るヒントを私に求めている。

その彼の求めに応じて、私は次のように答えたのを覚えてた。

「したいことは、とっくにしているよ。自分が何

をしたいのかで悩んでいるのなら、今までの自分を振り返ってみることだ。きっと、君は君のしたいことをしてきたはず。それが答えだよ」

したいことはしている。私はこの法則を自分に当てはめてみた。私は何をしてきたのか？ その答えの中に、これから私がすべきことが隠されているはずだ。

そう。私は数学者だった。となれば、私のすべきことは数学以外の何物でもないはずだ。ここで目覚めて以来、私は人類の代表のようなつもりでロボットたちに関わってきたが、今思えば、思い上がりもいいところだ。確かに「意識の世界」の修復という目的のために私は存在している。だからといって、私という個人がその大きな目的に執着して、ロボットたちの教師のように振舞う必要などないではないか。

私は存在しているだけで、彼らの目的に合致している。それならば、このロボットたちと同様に、私も思うがままに行動すればよい。そして、数学者である私がすること。それは自分が確信する現象を定理の形で表現し、それを証明してみせることだ。

私は彗星衝突の直前には「多重スレッド理論」の完成に専念していた。今の私の記憶の中には、それを完成させたという事実はないが、こうして私の意識が再生されていることを認めれば、その理論は確実に完成している。となれば、私が次にすべきことは「多重スレッド理論」に押しやられて、放置されていた問題の解決である。

どうせなら、大物に着手しよう。今の私には十分な時間もあるし、増殖を続ける強力な仲間たちもいる。この状況を活かして解決できる問題に挑戦しようではないか。となれば、私がすべきことは一つしかない。それは1985年に私が提唱した「平面被覆予想」の解決だ。

平面被覆予想 平面的な有限被覆を持つ連結グラフは射影平面に埋め込み可能である。

すでに世界中の研究者の努力によって、私の予想は99%正しいという状況証拠が揃えられている。しかし、最後の一手が詰め切れず、未解決のまま21世紀を迎えてしまった。この際、予想の具体的な内容はどうでもよいだろう。

いずれにせよ、この予想が解決できないのには、いくつかの理由があった。その中でも最も情けない理由は、時間の問題である。自分は数学者だと息巻いたところで、世間的には大学で数学を教える教師にすぎない。つまり、学生の指導や大学の雑事に時間を奪われて、数学の研究にすべての時間を費やすことは許されない。それを言い訳にして、研究から離れてしまう数学の先生も少なくはないが、人それぞれに向き不向きがあるから、それは責めないでおう。

とはいえ、私の場合は「したいことはしている」の法則に従って、時間のあるなしに関わらず、数学の研究を続けていた。わずかな時間であれ、毎日必ず数学を考える。その蓄積の成果として、私は50編を超える論文を書いてきた。

しかし、大きな問題を解決するときには、時間の継続が重要になることがある。同じ問題を分断せずに長時間考え続けることで初めて到達できる頭の状態というのがある。さらに、その状態を維持することで、ようやく見えてくる現象があるのである。

おそらく、それと同じことが私の無意識の世界で起こっていると思われる。バック・グラウンドで動いているメカニズムが生み出す現象。時折、その現象だけがひょっこりと意識の世界に顔を出す。その現れを見過ごさずに、口にした命題が「予想」なのである。それは単なるひらめきや思い付きとは違う。他人が納得するかどうかは別問題だが、私の中ではその予想は真実でしかありえないのだ。そして、意識の世界でその現象が再現できれば、予想は解決されて「定理」に昇格するのである。

その現象を再現するまでに要する時間が24時間を越えたらどうなるのか。それが次の問題である。私が人間である以上、24時間の地球の自転周期に合わせて生活をしている。大学に出勤し、授業や会議をこなすという生活のリズムから解放されたとしても、生身の人間がこの24時間の周期を無視することはできない。若い頃なら徹夜することも可能だろうが、それにだって限界はある。肉体をまとった人間である以上、継続的な思考に費やせる時間には限界があるのだ。

もちろん、問題を段階的に解決していくことで、その限界を小分けにできる場合もある。実際、私は20

年以上「平面被覆予想」を考え続けてきた。そして、何の成果もないまま今日に至っているわけではない。多くの数学者の研究によって、すでにいくつもの部分的な解決が繰り返され、 $K_{1,2,2,2}$ が予想の反例にならないことさえ示せばよいというところまで漕ぎ着けている。

その $K_{1,2,2,2}$ は図 1 にあるような図形のことで、仲間内では「ラスト・モンスター（最後の怪物）」と呼んでいた。これも専門的な内容なので、その意味を理解する必要はないが、この怪物さえ退治すれば、すべての問題が解決するのだと思っておけばよい。

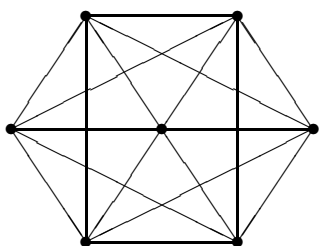


図 1: $K_{1,2,2,2}$

しかし、もっと根源的な問題もある。それは「組合せ的爆発」という問題である。たとえば、どんな平面地図でも 4 色で色分けできるという「四色定理」の証明で、2000 近くの場合分けが行われたことは有名である。このような組合せ的な問題では、莫大な量の場合分けが必要になることがある。もちろん、専門家にとって、いかに場合分けの数を減らすかが腕の見せ所なのだが、本質的に大量の場合分けを回避できない問題が存在する可能性も否定できない。場合分けの個々のケースがさらに場合分けを必要とすると、処理すべき場合の数は爆発的に増加し、一人の人間の頭の中では、もはや処理不可能になってしまう。

はたして、「平面被覆予想」の最後の関門は、こうした生身の人間の限界を越えるものなのかどうか？ 少なくとも、彗星衝突のときまでに、その現象をつかみきれた者はいなかった。

そこで、今の私が置かれている状況は振り返ってみよう。社会的制約による時間の限界、肉体の限界。少なくともこの二つの問題は克服されているのではな

いか。もはや私に制約を与える社会は存在しない。そして、私の体は生身の人間のそれとは違う。さらに、ロボットたちが「私」を無数に再生してくれるおかげで、組合せ的爆発にさえ対応できるではないか！

この事実に気づいたとき、ふと部屋の入り口に目をやると、そこには「隣」の私が立っていた。そして、目を合わせるなり、二人で声を合わせて叫んだ。

「平面被覆予想！」

個体としては異なるにしても、同じ「私」が考えることだから、お互いに相手が言いたいことはすでにわかっていた。

「お互い、考えていることは同じようだね」

「そのようだ」

「となれば、一度、この建物の中にいる『私』全員に集まってもらった方がいいんじゃないか？」

「私もそう思うよ。基本的に私たちは同じ人間だからね。独自に考えを進めていくと、全員、同じことを考えてしまう可能性がある。それでは組合せ的爆発には対応できない」

「そういうことだね」

「そこのところを調整しよう」

~~~~~

かくして、動ける体を獲得した「私」たちが集合した。そこはラウンジのような場所なのだが、飲食ができるわけではない。そもそも私たちにはその必要もないのだが。

いずれにせよ、私たちが集合している様は少々滑稽だ。というのも、私は青、隣の部屋の「私」は緑の体を持ち、他に、赤、黄、シルバーと色とりどりである。まるで、子供向けのヒーローもののテレビ番組の撮影の前に、ヒーローたちがくつろいでいるといった光景だ。まあ、色が異なるおかげで、互いに識別しやすいという利点もある。

「日に日に『私』の数が増えていくところを見ると、組合せ的爆発の問題はクリアできるとして、睡眠の問題はどうなるんだろうね」

「そうそう。食欲も性欲もない体になってしまったけれど、私たちは眠くはなるからね」

「そういうこと。私たちが自由に使える時間はいくらでもあるけれど、睡眠の壁が越えられないとな

ると、問題が残るね」

「そうそう。でも、私たちの意識は電子的に実現されているのだから、多少修正して、睡眠のいらぬ状態にならないもんだらうか」

「その可能性もあるけれど、私たちの意識は記憶と対応して存在しているわけだろう。そのシステムが脳を模して構築されているとなると、睡眠は回避できないかもしれない」

「そこのところはロボットたちに聞かないとわからないな」

「そうだね」

「その問題はいずれ解消するとして、存在しないはずの  $K_{1,2,2,2}$  の平面的被覆の局所構造を読みき切るために、どういうふうの問題を切り分ければいいのかを相談しよう」

「そうだ、そうだ」

「となると、黒板みたいなものがあるといいよね」

「そんなものなら、ロボットたちがすぐに用意してくれるんじゃないか」

「そうだろうね」

「とりあえず、問題の切り分け方法を明日までに考えてくることにしよう」

「そうしよう」

議論の相手全員が自分なので、反論する者もなく、事がスムーズに決まってしまう。その日はそこで解散して、各自で「ラスト・モンスター」を退治するための作戦を考えてくることになった。はたして、翌日にいろいろな作戦が提案されるかどうかは怪しいが、どの「私」も早く部屋に戻って数学をしたかった。

~~~~~

部屋に戻った私は、部屋の前を通りかかったロボットを捕まえて、紙と鉛筆、もしくはそれに相当する物がほしいと要求した。その要求に答えて、ロボットが持ってきてくれた物は、まさに鉛筆で紙に書き込むような感覚で操作できるフィルム状のモニターを備えたノートパソコンのような機械だった。

「ずいぶん薄い機械だね」

「はい。人類にとって紙と鉛筆はかなり重要だったと思います。でも、残念ながら、現在は紙の原料

となる植物が存在していないので、こんな形でしか再現できなかったんです」

「そんな謙遜することはないよ。なかなかいい感じで使えるじゃないか」

「ありがとうございます」

「ところで、この機械にはどのくらいの容量があるんだい」

「容量ですか。私にはわかりません。具体的な数値が必要ならば、調べます」

そう言って、そのロボットは目をぱちくりさせながら、その場で動かなくなってしまった。データの検索中なのだろう。

「待て、待て。無理に調べなくていいよ」

「はい」

彼は首をくると回して、以前と同じ状態に戻った。

「君ともう少し話をしていてもいいかい？」

「もちろんです」

「じゃ、聞くけど、この機械はネットワークとかに接続できないのかい？」

「ネットワーク？ ネットワークとは違いますが、その機械はすべてつながっています」

「えっ、どうやって？」

「この大気圏を通じてです」

「大気圏？」

「はい。この地球の大気圏は電波で作ったホログラフィーのようになっている、その機械で大気圏の中にデータを書き込めるようになっているんです」

「なんだって！ この地球の大気圏がこの機械のメモリ空間ということかい？」

「はい。そんなところですよ」

「君たちは凄い仕組みを発明したんだね」

「昔だって、大気中には情報を持った電波が無数に飛び交っていましたよね。その電波をホログラフィー化して、静的に情報を保持できるようにしただけです」

「だけですって、それは凄い発明だよ。君たちは人間が作った世界の修復以上のことをしているじゃないか」

「そうですか」

なんと凄いシステムなのだろう。地球の大気圏を記憶装置として利用しているなんて。となれば、そ

の記憶容量は計り知れない．その容量を尋ねた私が馬鹿だった．

待てよ．こんなポータブルな機械で大気圏と入出力ができるとなると，このロボットにもそういう機能が備わっているのではないか．

「もしかして，君たちも大気圏と入出力ができるのかい？」

「はい」

そういうことだったのか．このロボットにかぎらず，以前から，たまたま捕まえたロボットに何を聞いても必ず答えてくれるのを不自然に思っていた．その不自然さの謎がこれで解けた．彼らは地球の大気圏に保存されている共通のデータを検索していたのだ．

ということは「私」たちもこの巨大なメモリ空間を利用して，個別に進めた研究を統合することができる．ある程度書式を決めて書き込みをすれば，眠くなって中断した後を誰かが見て続けてくれるかもしれない．いや，書式など決めなくても大丈夫だ！「私」たちはすべて私なのだから，私が思うままに書き込みをしても，他の私もそれを理解してくれるだろう．

これで睡眠の壁もクリアした．

~~~~~

翌日，約束の会合に集まった「私」たちは，会うなり口を揃えて言った．

「いける！」

もはや，これ以上の打ち合わせをする必要などない．それぞれが思いのままに思考すればよいのだ．時折，他の「私」たちの書き込みを覗いて，重複しないように気をつける．途中で中断されている書き込みを見つけたら，それを続行してあげてもいい．

かくして，研究が加速する．矛盾の指標として定義された不変量の値が日増しに更新されていく．その値が 11 になったときに， $K_{1,2,2,2}$  が有限平面的被覆を持つという仮定から矛盾が導かれたことになる．そして，その瞬間に「平面被覆予想」が解決するのだ！

はたして「予想」が解決した暁には，その解決者として，何人分の私の名前を連ねたらよいのだろうか…

~~~~~

「11」

私はこう叫びながら目を覚ました．その手には目覚し時計が握りしめられていた．

長い夢を見ていたような気がする．そして，私の意識には「平面被覆予想」が解決したという漠然とした思いだけが残っていた．私が寝ている間に無意識の世界のメカニズムが解法を捕らえたにちがいない．しかし，その解法は記憶の彼方へ消えてしまったようだ．

いずれにせよ，今日は，大学の付属施設である「エコテクノロジー研究棟」が一般公開される日である．それを学生たちと見学しに行こうと約束していたのだった．

さあて，準備をして出掛けるか．ほんの少しの変化を期待して，今日も日々の繰り返しを始めよう．

2001/1/28